

発熱診療プラチナマニュアル

著：川村 隆之，三村 一行

クラスター分類を核に，マニュアルとは思えない， 少々しつこいくらい面倒見の良い解説

あの『感染症プラチナマニュアル』で日本の医療書界に金字塔を打ち立てた岡 秀昭先生が率いる，埼玉医科大学総合医療センター総合診療内科・感染症科から，新進気鋭の感染症医である川村隆之先生と三村一行先生の二人が満を持して世に送り出したのが，この『発熱診療プラチナマニュアル』である。

川村先生とは直接のご面識はないが，私と三村先生は大学院生時代，同じ指導教官のもとで基礎研究をともにした仲であり，その後も親しくさせてもらっている。実際の臨床現場で一緒に働く機会がなかったものの，基礎実験の場で垣間見た三村先生の真摯で実直な仕事ぶりと，面倒見の良さには心底感銘を受けたものである。私はそれなりにミーハーで，診療や研究に関しては相手や情報源によらず批判的吟味を欠かさないようにしているものの，心から信頼している人の推薦や，ましてやその人が出す本となると，思考停止して飛びつく傾向がある。私にとって無条件で信頼できる数少ない医師の一人が，三村先生だ（信頼できる医師が世のなかに少ないというわけではなく，単に私の交友関係が狭いという事実を示しているだけである）。

三村先生が世に出したこの本は，はたして良書なのである。大学院での2

年間の濃密な時間，そしてその後のお付き合いを通して，「三村ism」が自分のなかに確かに浸透しているのを感じていた。今回，川村先生が序文で「良くも悪くも適当」だったと振り返る，その「さいたま式 fever」をベースにした本書を読むことは，私のなかにあった「適当だった三村ism」（それは川村ismでもあるだろうが）を，より確固たる血肉へと変えてくれるように感じている。

本書では発熱診療が，誰でも，正しく，体系的アプローチで臨めるように構造化されている。その根幹をなすのが，第2章で概説される「さいたま式発熱診療7ステップ」だが，まず第1章では，「検査前確率」の考え方や「炎症性マーカーの誤用を防ぐ3大原則」といった，検査に頼りすぎる診療から脱却するための診断学の前提が丁寧に解説されている。続く第3～5章では炎症のフォーカスを推定し，本書の最大のポイントである「クラスター分類」へ落とし込むために必要な問診と身体診察のテクニックを扱っている。身体診察の見本動画へアクセスできる点は非常に秀逸で，周りにお手本がない普段の診療で基本を再確認するのに大いに役立つ。第6章では各感染症の「判断基準」が解説されており，上気道炎は「咳嗽，鼻汁，咽頭痛の3つ

の症状が同程度存在する」といった，ある意味「当たり前」の内容となっている。何でも風邪や胃腸炎にしていまいたくなる心理が働きやすい忙しい診療現場において，この「当たり前」の判断基準が不文律として存在することが，その後の質の高いクラスター分類を可能にし，玉石混交の鑑別を取捨選択してそぎ落としていくことにつながる。初学者は第6章の基準を叩き込み，熟練者は今一度リセット・アップデートすべきである。本書の真髄ともいえる第7，8章では，クラスター分類に関連するアプローチが続き，第9章の「時系列に沿ったアプローチ」と第10章「各論ひとくち解説」は，クラスター分類で混みあった頭のなかを整理する助けとなっている。

マニュアルとは思えない，少々しつこいくらい面倒見の良い解説に，三村先生の面影を感じながら，そして川村先生と対話しているように感じながら，日々の内科診療・感染症コンサルテーションの新たなお供とさせていただいている。

中久保 祥

（北海道大学病院 感染制御部/呼吸器内科）



MEDSi

3,080円(本体2,800円+税10%)

三五変/352頁

ISBN978-4-8157-3135-9